

・鳴海周平の・



ぶらり旅



1200年の歴史をもつ街、京都。この街では、日本らしい風情や情緒を生活の中に垣間見ることができます。伝統工芸や食文化、歴史的建造物。たくさんの魅力を持つ京都を訪ねました。

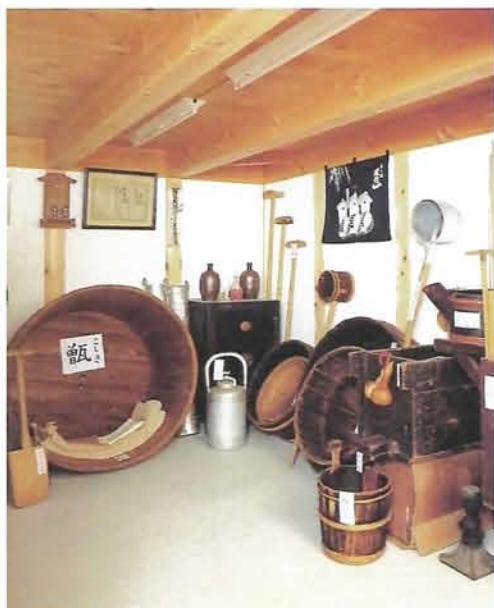


▲代々伝わる酒造りの道具はいまやお宝!

「よつじで京都へ。遠ごとこの本当に疲れまじたね。」

そう言ひて迎えてくれたのは、中村弘和さん、裕佳子さん夫妻。健康飲料「壽源水」を製造・販売している中村堂の社長さんです。

中村弘和社長とは、何と数年勉強会などと一緒にセセレーティングいただき、「自然の恵みをお客様に伝えたい」という理念を共有させていただいている間柄です。



な人間関係を築いてきたのでしようが。

「私はもともと造り酒屋だったんです。創業は1862年ですから約一世纪半、この地で商売を続けさせていただいてます。転機は昭和16年、祖父の中村宇吉が酒を作る過程で起つる不思議な現象に気付いたことから始まります。酒を仕込む蔵で働いている

「京都という街はとにかくとつと保守的ですね。何代も続いている家がたくさんありますし、ちょっと観光に来たくつらでは本当の京都を理解するのは難しいかもしません。」

中村堂の7代目として生まれ育った中村さんは、となり近所とも百年を超える代々の付き合いをしていました。いつした長い付き合いは、信頼関係がなければ続かないもの。中さんは代々どのようにして良好

な人間関係を築いてきたのでしようが。

「私はもともと造り酒屋だったんです。創業は1862年ですから約一世纪半、この地で商売を続けさせていただいてます。転機は昭和16年、祖父の中村宇吉が酒を作る過程で起つる不思議な現象に気付いたことから始まります。酒を仕込む蔵で働いている

人たちは、なぜか風邪をひかないといふんですね。調子が良くない

時でもこの蔵に入ると治ってしまう。そこでこの仕込みの過程に何か

秘密があるのでは、と研究を進めました。



▲ユナルゲン(現・壽源水)の展示室で製造工程などを教えていただきました

酵に関係している有用菌を発見し、さらに改良を加えたものを『ユナルゲン』として世の中に送り出しました。昭和23年には医薬品として認可を受け、以来たくさんの人たちの健康に役立つてきました。

徳島の5つ子ちゃんの名づけ親としても知られる清水寺の故・大西良慶管長も「ユナルゲン」により70代の頃にかかる病を克服され、109歳という長寿をまつったとのことです。

「大西良慶管長からいただいたこの「天得觀世音」は、昭和17年に祖父の宇吉が「ユナルゲンで持病が全快した御礼」と書いて退役陸軍中将高島友武子爵よりいただいたものなんです。子爵はこの石仏を宇治川上流の河底で見つけられ、ずっとたまつに祀ってきたのですが、血の病状が全快した御礼は感謝してもしきれない、といふことで一番たいせつにして

いる石仏をくださったのです。この石仏は清水寺にてヶ月間安置され、大西良慶管長より開眼供養を受けて私共のところに来ました。代々中村家を護つてくださつてますのです。」

たしかに見れば見ぬほど、観音様のよう。これがまつたくの自然石といった感じです。

「昭和54年までは造り酒屋も続けていましたが、現在は『ユナルゲン』を「壽源水」と改め、より多くの皆さんに喜んでいただけるように努めています。」「やつとお客様の喜ぶ顔が見たい」中村さんの言葉に、京都の街で代々良好な関係を築いていただけた理由を感じました。



▲中村家に代々伝わる「天得觀世音」を手にとらせていただきました



▲中村弘和社長の祖父であり、ユナルゲン開発者の中村宇吉先生



▲壽源水のカイカ、ミズキ、カンロの各種

「今回は会報誌の取材でしたよな。京都らしさ、素敵な方を紹介しますよ。染色作家のそのための玄才先生という方なんですかね。」

中村さんの紹介をいただき、世界的な染色作家としても著名な、そのための玄才先生のお宅を訪ねました。

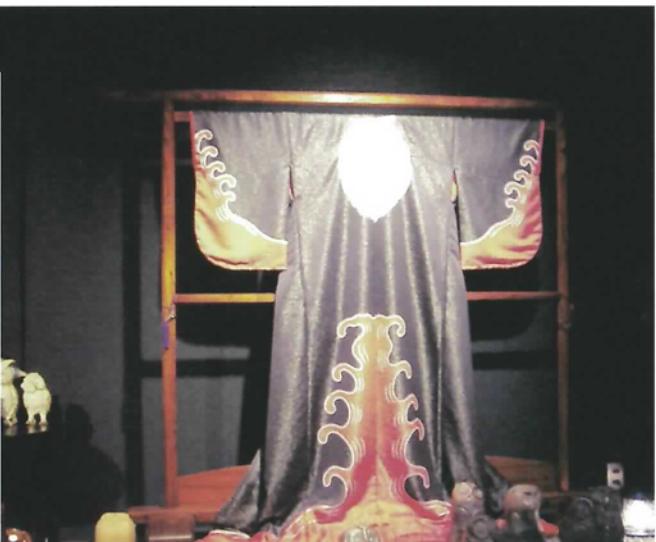
玄才先生は京都生まれで、若い頃から染色作家として活躍していました。

先生の作品は海外でもたいへん高い評価を得ていて、森光子さんや松坂慶子さん、名取裕子さん、山口智子さん、故・夏目雅子さん、ブルック・シールズさんなど、たくさんの方優さんに、着物をデザインして提供しています。

「僕がこの道に進むつと思つたのは、大学時代に会つた現在の家の影響なんです。家の父は、当時着物作家として大活躍をしていた方で、とにかく格好良かった。北大路魯山人の愛弟子だった方ですから



▲玄才先生とアトリエの入り口で



▲玄才先生のアトリエは黒一色！ 約3万羽のフクロウたちが歓迎してくれました。

ね。雲の上の存在でしたよ。」

憧れが強くなるにつれて、自分の進むべき道を確信していました。

「ただ当時の私には知識や技術、人脈もない。そこで地元の信金に勤めながら30歳までに独立することを目指したんです。信金時代にはたくさんの方々との出会いがあり、現在の私があるのもうつした皆さんのおかげなんですね。」

独立後、小さな借家で洋服地のプリント屋さんに生地を納めていた玄才先生に転機が訪れます。

「わざわざこの頃、千葉にデイズリー・リンクスが出来るところへ、アメリカの本社から役員の皆さんがいらっしゃったんですね。その時に日本らしい所を見たじ、とにかく京都におじでになり、僕の工房にも立ち寄つてくださったんです。突然なのでびっくりしましたけどな。」

しかしビックリはまだにじみませんでした。

「それから一年くらいたある日、突然デイズリー本社の副社長からの手紙が届いたんです。『アメリカで作品を発表する気はないか？』ってじつ内容で、封筒には航空券まで入つてました。」

じつして早速アメリカに向かつた先生を、さりげなくクリフが待つていました。

「ホテルに着くと昭和天皇が晩餐会を催されたといつボールルームが借りてあり、この豪華な部屋で作品発表が出来ました。驚いていた間もなく、アメリカのトップ女優が続々と入つてきました。銀幕の中でしか見たことのない憧れの存在ですからね、それは驚きましたよ。」

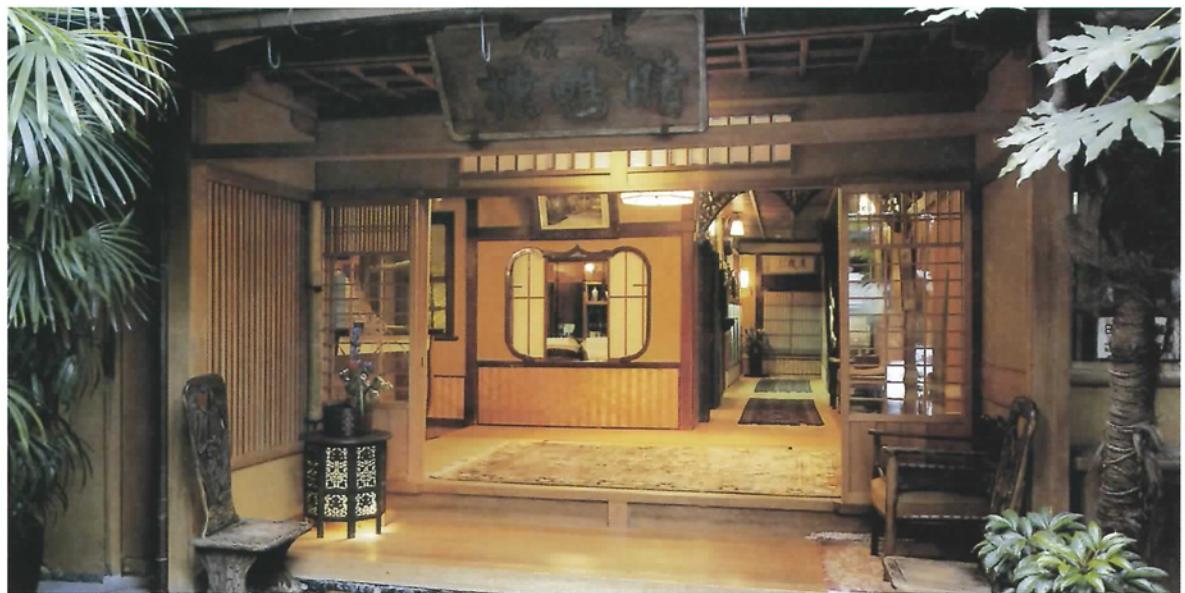
じつしてたくさんの豪華ゲストが訪れ、作品は即日完売。その日の出来事は後日地元の新聞や、日経新聞など大きくとりあげられました。

「この記事がまた話題をよびましたね。当時の大蔵大臣、宮沢喜一さんの紹介でロックワードさんとね会うする機会もいたいたんです。日本の文化の素晴らしさを正確に伝えていかなければならぬ、との時強く感じましたね。」

その後は日本を代表する染色アーティストとしてマスクなどにも多数出演。現在は「天地自然との関わりを表現する」とじつにハセハラのむと、新しい作品を創造する毎日だそうです。

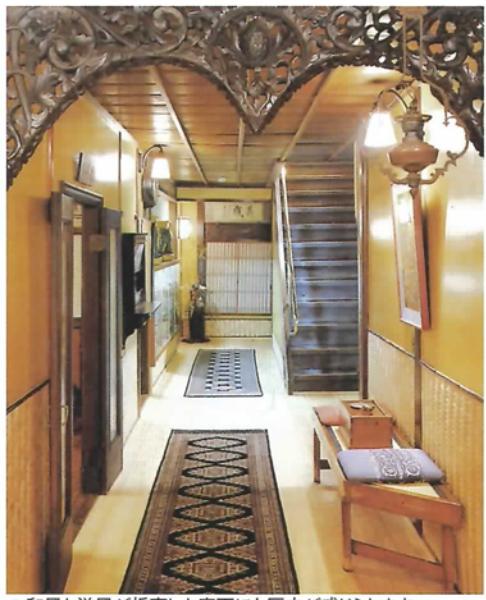
「とにかく全力で駆けてきた、じつじつ感じます。田の前にあることをただ一生懸命にやつしきたからじつじつ状況になってしまった。人との出会いも環境も、ひたむきさにめまして神様がアレンジメントしてくれるものなかもしません。強く想つたことは必ず現実になり

ぶんぶん通信.....



▲晴鶴樓は「晴れた鴨川のほとりに建つ楼閣」を意味しています。

「おすしな。」
そめのざ玄才先生の確信に満ちた言葉にとどきりの
元気をいただきました。



▲和風と洋風が折衷した廊下にも歴史を感じられます。

夜になり、再び中村さんご夫妻と合流しました。

「お腹、すいたでしょ。美味しいといいので夕食にしま
しょう。」

その言ひて中村さん夫妻が紹介してくれたのは旅籠^{パッタゴ}
「晴鶴樓」。いたるところに歴史の重みを感じることの
建物は、天保2年の創業以来ほとんど変わらない
との事。京都の四季がそのまま表現されたような繊
細な料理は、歴史の重さと相まっていつぞ京都らしさ
を感じさせてくれます。

「阪神大震災の時にね、古くからある京都の街はほと
んど被害を受けなかつたんです。でも昔から竹やぶだ
つた所を開拓して最近宅地になつた場所なんかはほ
ぼ全壊ですよ。昔の人たちは良く考えて街づくりを
してましたんだな、って思ひますね。」



▲中村堂の中村弘和社長と奥様の裕佳子さん。
愛娘のかば子ちゃんと一緒に



▲かば子ちゃんの名刺の肩書きは「営業部 No.WAN」

「歴史は智恵の宝庫」そんな言葉をかみしめる」と
が出来た、とても貴重な旅になりました。
なお、今回のぶつり旅は、中村堂さんに多大な協力を
いただきました。
この場をお借りしてお礼を申し上げます。どうもあ
りがとうございました。